

# 第1章 第1期(通常期)における勤務実態

## 1. 第1期の調査協力校の概況

第1期の調査期間は、平成18年7月3日(月)から平成18年7月30日(日)までの4週間である。

まず、第1期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第1期において回答のあった332校すべての小学校・中学校が、調査期間の後半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。夏季休業期前の通常の授業などが行われている期間(以下、「通常期」)には、試験や成績処理などの学期末に伴う業務が集中する傾向にある。これに対して夏季休業期には、補習などの特別な場合をのぞいて授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。そのため、通常期と夏季休業期では、教員の業務における質と量に大きな違いがあると考えられる。そこで第1期については、調査協力校の夏季休業期の開始日の情報をもとに、データを通常期と夏季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の開始日の分布は表2-1-1のようになっている。

分布をみると、7月21日(金)から夏季休業期を開始するという学校が、75.0%(249/332校)と最も多い。つまり、第1期の調査協力校のうち75.0%の学校において、調査期間(7月3日から7月30日)の3~4割に該当する期間(10/28日間)が夏季休業期になっている。

本章では、夏季休業期前の教員の勤務実態の特徴を検討するため、第1期のうち通常期について報告を行うこととする。なお、夏季休業期の教員の勤務に関する分析は、次の第2章において第2期のデータをもとに行う。

表2-1-1 第1期の調査協力校における夏季休業期の開始日

夏季休業期 開始日	7月18日 (火)	7月19日 (水)	7月20日 (木)	7月21日 (金)	7月22日 (土)	7月23日 (日)	
	3	2	10	249	26	3	
	0.9	0.6	3.0	75.0	7.8	0.9	
7月24日 (月)	7月25日 (火)	7月26日 (水)	7月27日 (木)	7月28日 (金)	7月29日 (土)	計	
5	15	8	9	1	1	332	校
1.5	4.5	2.4	2.7	0.3	0.3	100.0	%

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第1期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-1-2)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間49分、持帰り時間量は平均47分、これらを合わせた時間の平均は2時間37分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間26分、持帰り時間量は平均25分、これらを合わせた時間の平均は2時間51分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は、中学校の方が小学校よりも約40分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも約20分長い。

次に、第1期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-1-3)。

小学校では、残業時間は平均で28分、持帰り時間は平均で2時間18分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は2時間47分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的に休日には学校で業務を行っていないといえる。一方で、休日の持帰り時間においては、中央値と平均値に30分のひらきがあることからわかるように、小学校では、休日に持帰り仕事をする人の間では時間量の差が大きい(表2-1-3)。これは後の図2-1-4からも確認できる。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均1時間50分、持帰り時間は平均1時間47分、これらを合わせた時間の平均は3時間37分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値におよそ50分から60分のひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-1-3)。これは後の図2-1-3や図2-1-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも約1時間20分長い。持帰り時間の平均は、小学校の方が中学校よりも約30分長い。小学校、中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第1期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約1時間長く(表2-1-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間50分長い(表2-1-3)。特に持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が約1時間30分長くなっており、休日には学校で業務を行わないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がかがえる(表2-1-2、表2-1-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約2時間長く(表2-1-2)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-1-3)。持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間20分ほど長い(表2-1-2、表2-1-3)。

表2-1-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間49分 〔1時間40分〕(1.073)	47分 〔32分〕(0.845)	2時間37分 〔2時間30分〕(1.322)
中学校	2時間26分 〔2時間19分〕(1.237)	25分 〔10分〕(0.613)	2時間51分 〔2時間46分〕(1.368)
全体	2時間09分 〔2時間00分〕(1.203)	35分 〔17分〕(0.752)	2時間44分 〔2時間38分〕(1.352)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-1-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	28分 〔0分〕(1.081)	2時間18分 〔1時間48分〕(2.295)	2時間47分 〔2時間20分〕(2.399)
中学校	1時間50分 〔48分〕(2.435)	1時間47分 〔1時間00分〕(2.220)	3時間37分 〔3時間12分〕(2.920)
全体	1時間12分 〔0分〕(2.051)	2時間01分 〔1時間18分〕(2.270)	3時間14分 〔2時間42分〕(2.726)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第1期(通常期)の教員全体における残業時間量、持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第1期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-1-1から図2-1-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

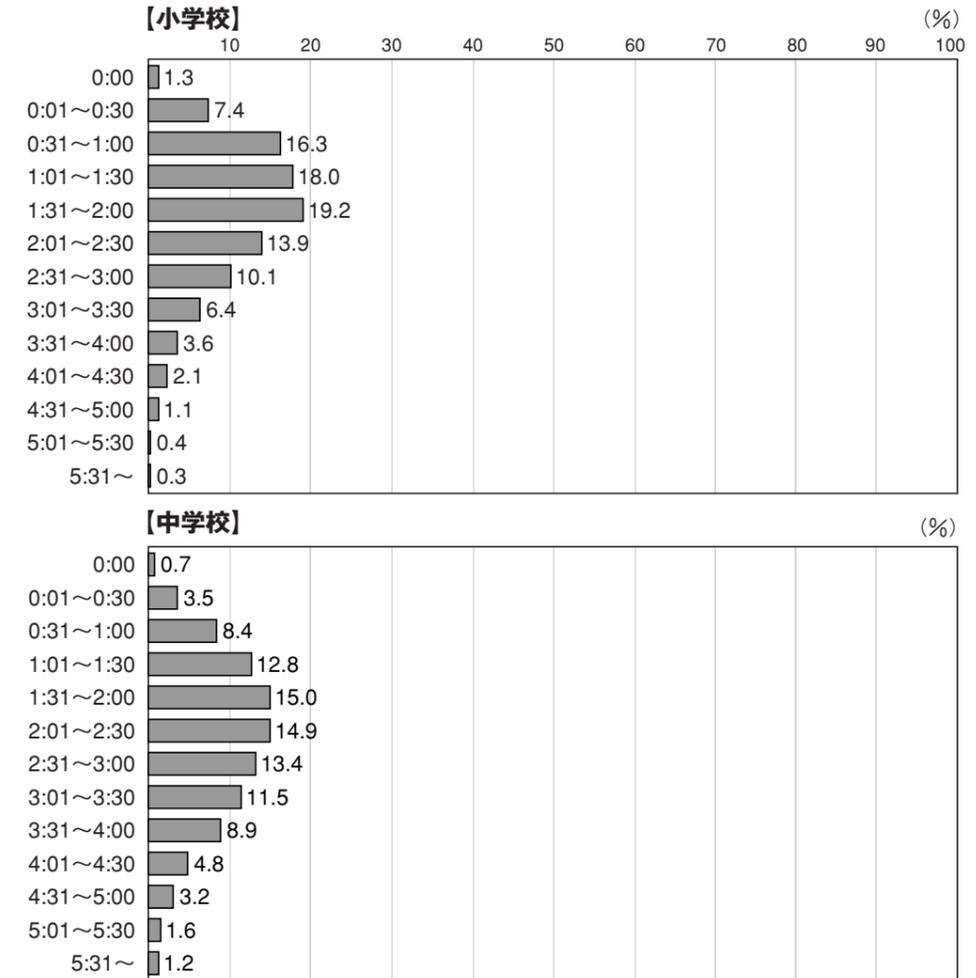
まず、第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-1-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.3%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は7.4%、31分～1時間以下は16.3%となっており、約25%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は18.0%、1時間31分～2時間以下の教員は19.2%、2時間01分～2時間30分以下の教員は13.9%、2時間31分～3時間以下の教員は10.1%と、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員は6割に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割以上存在する。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.7%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は3.5%、31分～1時間以下は8.4%となっており、およそ1割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は12.8%、1時間31分～2時間以下の教員は15.0%、2時間01分～2時間30分以下の教員は14.9%、2時間31分～3時間以下の教員は13.4%と、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員は5割強に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員は3割以上存在する。

以上から小学校・中学校ともに、ほとんどの教員が勤務日に残業を行っており、過半数の教員が1時間01分～3時間以下の残業を行っていることがわかる。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-1-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討してみよう(図2-1-2)。

小学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が17.1%で、持帰り仕事を行わない教員は2割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は32.0%、31分～1時間以下は19.9%であり、過半数の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は3割いる。

中学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が29.6%で、持帰り仕事を行わない教員は3割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は43.4%、31分～1時間以下は14.0%であり、6割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割強いる。

以上、第1期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では3割ほどいる。また、小学校・中学校いずれにおいても、過半数の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

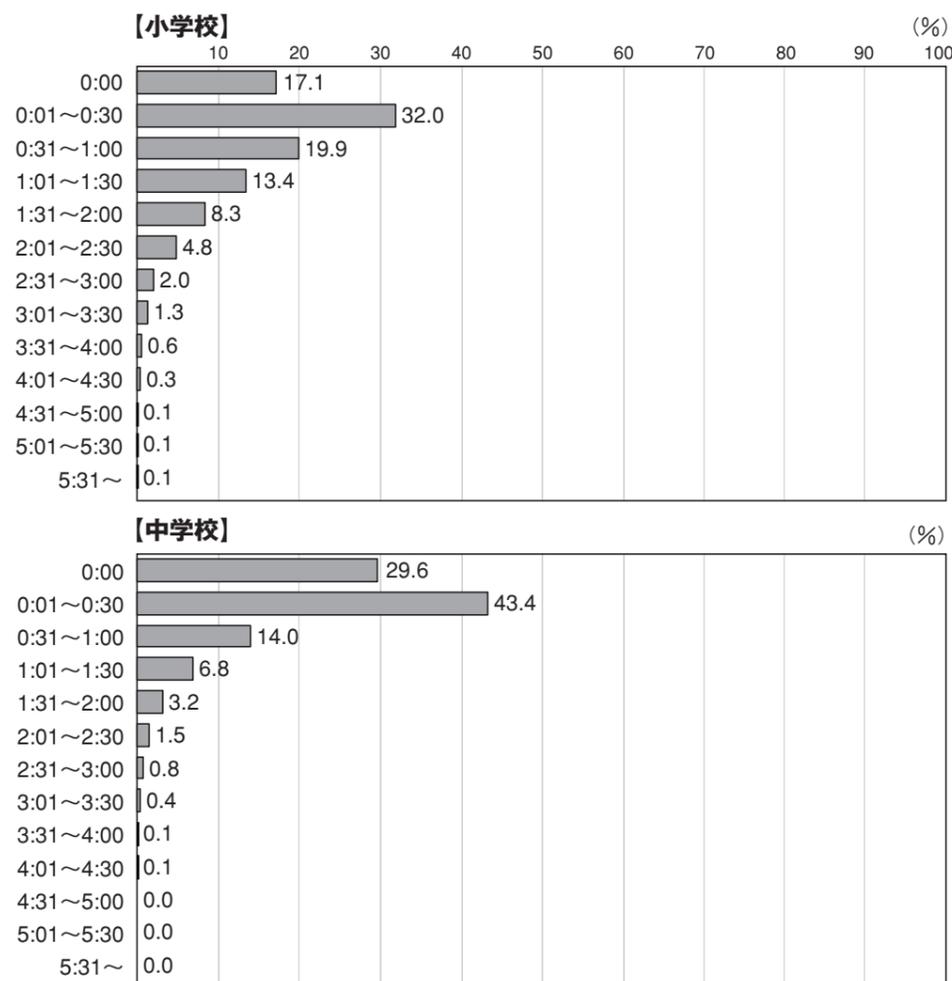
第1期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、過半数の教員が1時間01分～3時間以下の残業を行っている(図2-1-1)。持帰り仕事をしていない教員は小学校では2割弱、中学校ではおよそ3割弱となっているが、何らかの持帰り仕事のある教員の方が多数派であり、その過半数が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-1-2)。

次に、第1期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-1-3)。

小学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が72.8%で、残業を行わない教員は7割である。勤務日(図2-1-1)と比べ、休日には学校に出勤する教員は多くないといえる。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は1割、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

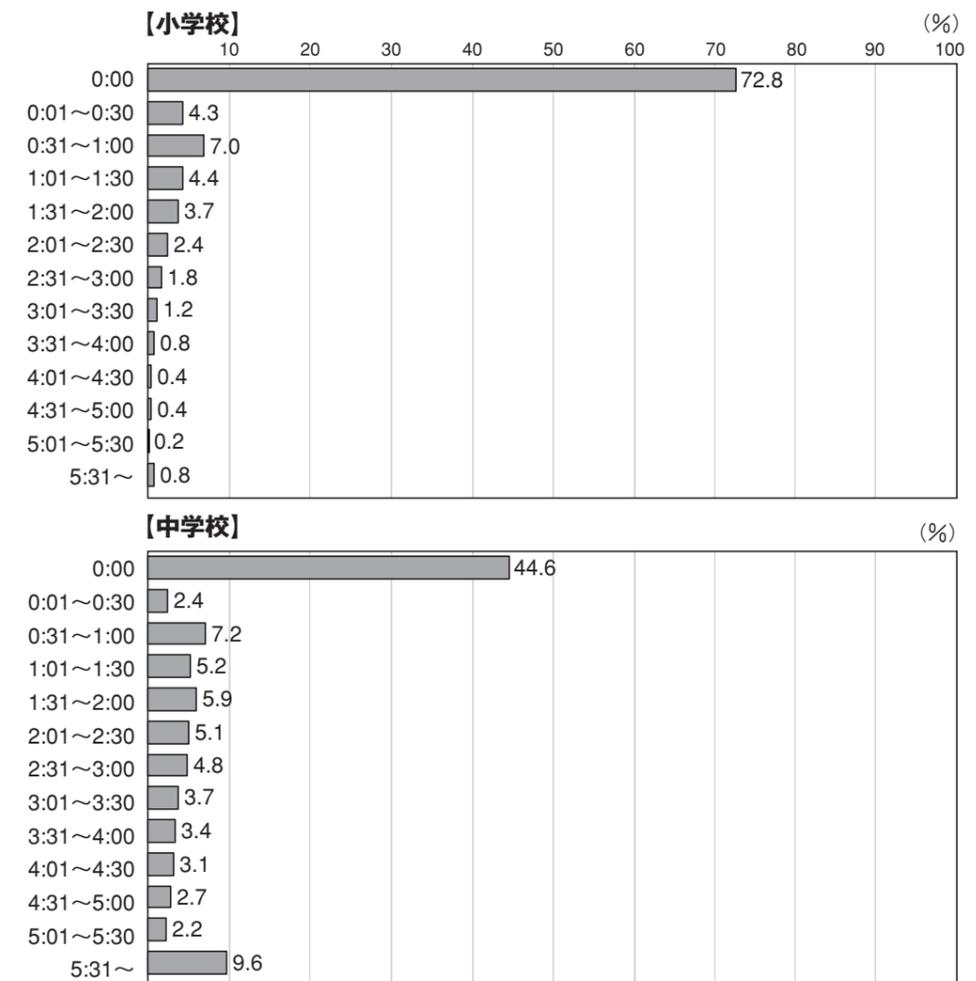
中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が44.6%で、残業を行わない教員は4割強である。勤務日(図2-1-1)と比べ、残業を行う教員は少ない。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が1割、1時間01分～2時間以下の教員が1割、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強、さらに5時間を超える教員も1割存在する。休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が1割存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

図2-1-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

図2-1-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

以上をまとめると、次のようにいえる。第1期(通常期)の休日における平均残業時間量については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在すると指摘できる。また、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は個人差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

次に、第1期(通常期)の休日における平均持帰り時間量についてみてみよう(図2-1-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割で、勤務日(図2-1-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は2割弱、1時間01分~2時間以下の教員は約17%、2時間01分~3時間以下の教員は約15%、3時間01分~5時間以下の教員は2割弱、さらに5時間を超える教員も1割強存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が3割で、勤務日(図2-1-2)と大きな差はない。休日でも7割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は2割、1時間01分~2時間以下の教員は約16%、2時間01分~3時間以下の教員は1割、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も1割存在する。

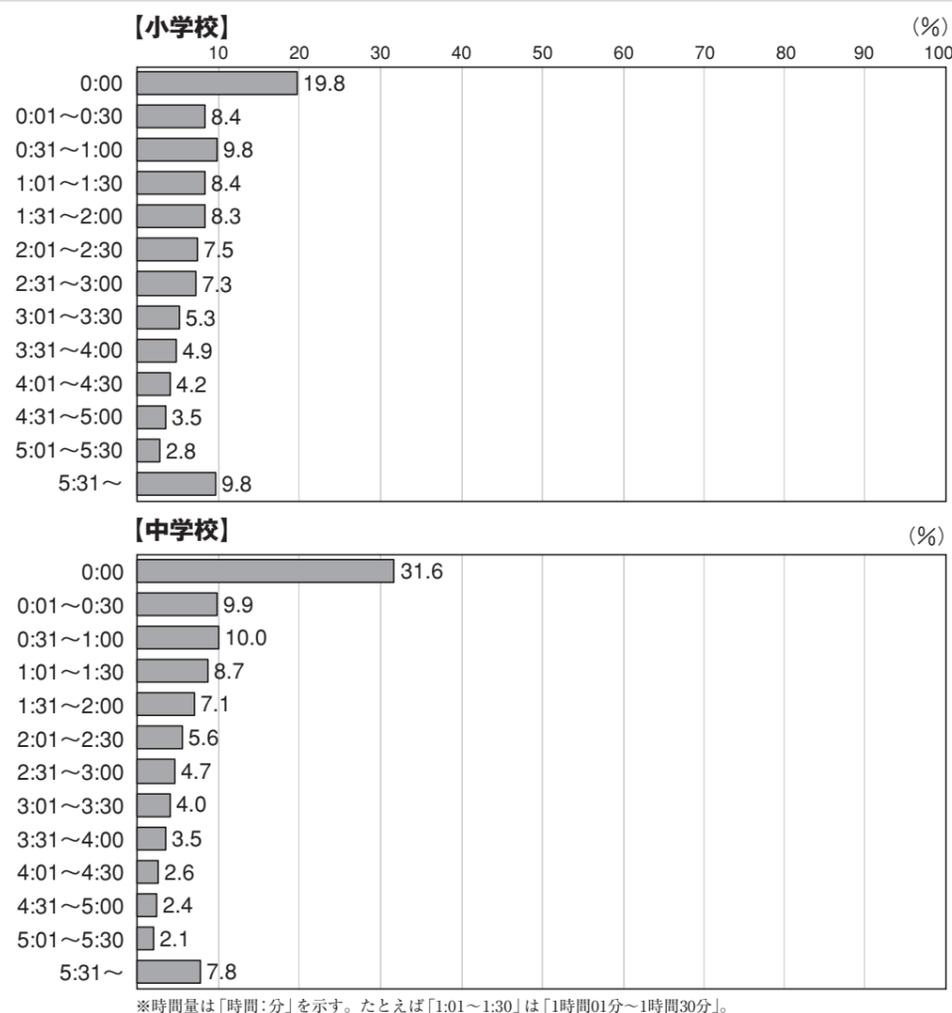
以上、第1期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では3割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える長時間の教員も1割存在すれば、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も1割存在する。

第1期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。また、中学校では、教員間での残業時間の差が大きい(図2-1-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では3割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-1-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第1期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、過半数の教員が1時間01分~3時間以下の残業を行っている(図2-1-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割弱、中学校では5割強であり、その残業時間には個人差がある(図2-1-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-1-2)と休日(図2-1-4)ではそれほど大きな差はなく、休日の方が若干増えるが、いずれも小学校ではおよそ8割、中学校では7割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は過半数が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-1-2)、休日の持帰り時間は、教員間で差が大きい(図2-1-4)。

図2-1-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第1期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第1期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第1期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-1-4、表2-1-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは成績処理で、ともに28分である。これは、第1期(通常期)が多くの学校で学期末にあたるという时期的な特徴によると思われる。小学校で2番目に長いのは授業準備で18分、つづいて事務・報告書作成が12分、学校経営が9分である。中学校では2番目に長いのは部活動・クラブ活動で26分、つづいて授業準備16分、事務・報告書作成13分、学校経営10分である。ここから、小学校・中学校いずれにおいても残業時間における業務内訳は、事務的な業務が中心となっているといえる。中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わる(表2-1-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは成績処理で、小学校では24分、中学校では9分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに授業準備で、小学校では9分、中学校では5分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校で若干順位の変動はあるが、学年・学級経営が小学校で4分、中学校で1分、事務・報告書作成、その他の校務が1~3分ずつである(表2-1-5)。

次に、第1期(通常期)の休日について検討しよう(表2-1-6、表2-1-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く11分、以下、事務・報告書作成2分、保護者・PTA対応が2分、部活動・クラブ活動が1分、学校経営が1分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く78分、つづいて成績処理が11分である。以下、その他の校務が4分、事務・報告書作成が3分、授業準備が3分とつづく。小学校・中学校ともに成績処理が上位に入っており、10分以上と他の業務よりも長いのは、第1期(通常期)が学期末であるためだと考えられる(表2-1-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く91分、つづいて授業準備が13分、事務・報告書作成が9分、学年・学級経営が7分、その他の校務が3分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く45分、つづいて成績処理が27分、授業準備9分、事務・報告書作成5分、その他の校務5分である。小学校・中学校ともに成績処理が上位に入っているのは、やはり学期末であるためだと考えられる(表2-1-7)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、ほぼ同じ内訳である。ただし、業務の内訳は同じでも、業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における成績処理は11分であるのに対し、休日の持帰り時間においては91分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における成績処理は11分であるのに対し、休日の持帰り時間においては27分と増加する。ここから、成績処理などの業務は学校で行うことも多いが、持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-1-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	28分	成績処理	28分	成績処理	28分
2	授業準備	18分	部活動・クラブ活動	26分	授業準備	17分
3	事務・報告書作成	12分	授業準備	16分	部活動・クラブ活動	15分
4	学校経営	9分	事務・報告書作成	13分	事務・報告書作成	13分
5	その他の校務	7分	学校経営	10分	学校経営	9分

表2-1-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	11分	部活動・クラブ活動	78分	部活動・クラブ活動	42分
2	事務・報告書作成	2分	成績処理	11分	成績処理	11分
3	保護者・PTA対応	2分	その他の校務	4分	事務・報告書作成	3分
4	部活動・クラブ活動	1分	事務・報告書作成	3分	その他の校務	2分
5	学校経営	1分	授業準備	3分	授業準備	2分

表2-1-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	24分	成績処理	9分	成績処理	16分
2	授業準備	9分	授業準備	5分	授業準備	6分
3	学年・学級経営	4分	事務・報告書作成	2分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	3分	学年・学級経営	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

表2-1-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	91分	部活動・クラブ活動	45分	成績処理	56分
2	授業準備	13分	成績処理	27分	部活動・クラブ活動	25分
3	事務・報告書作成	9分	授業準備	9分	授業準備	11分
4	学年・学級経営	7分	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	7分
5	その他の校務	3分	その他の校務	5分	学年・学級経営	5分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第1期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

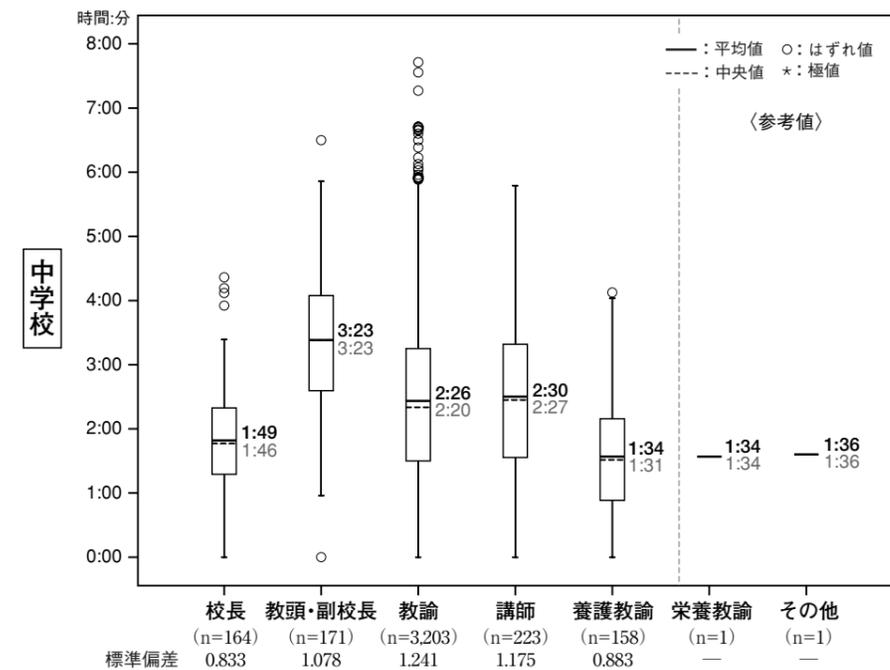
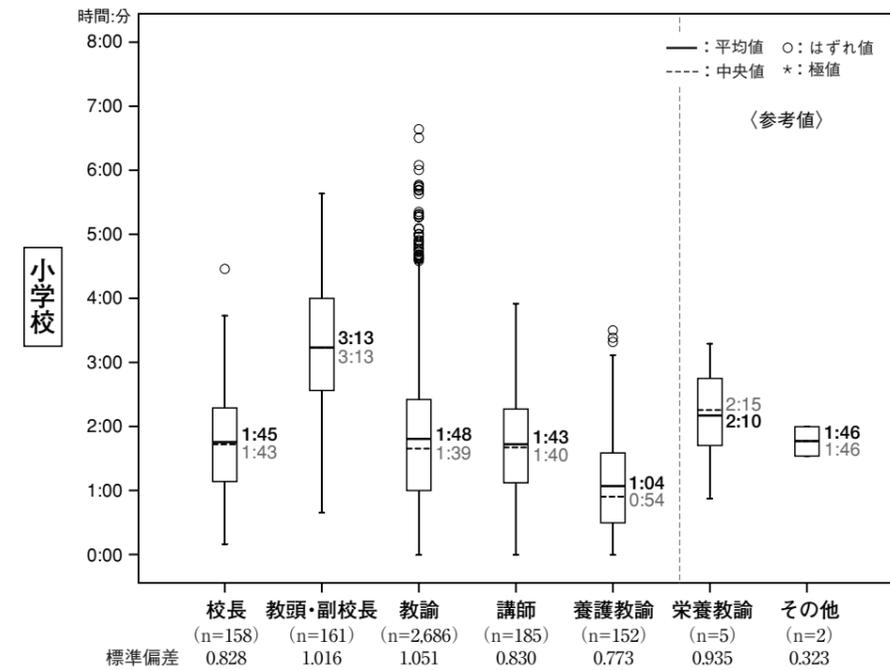
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-1-5の通り、小学校の教頭・副校長は3時間13分、中学校の教頭・副校長は3時間23分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間45分、教諭は1時間48分、講師は1時間43分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間49分で、教諭は2時間26分、講師は2時間30分と、校長よりも教諭・講師の方が40分ほど長くなっている。

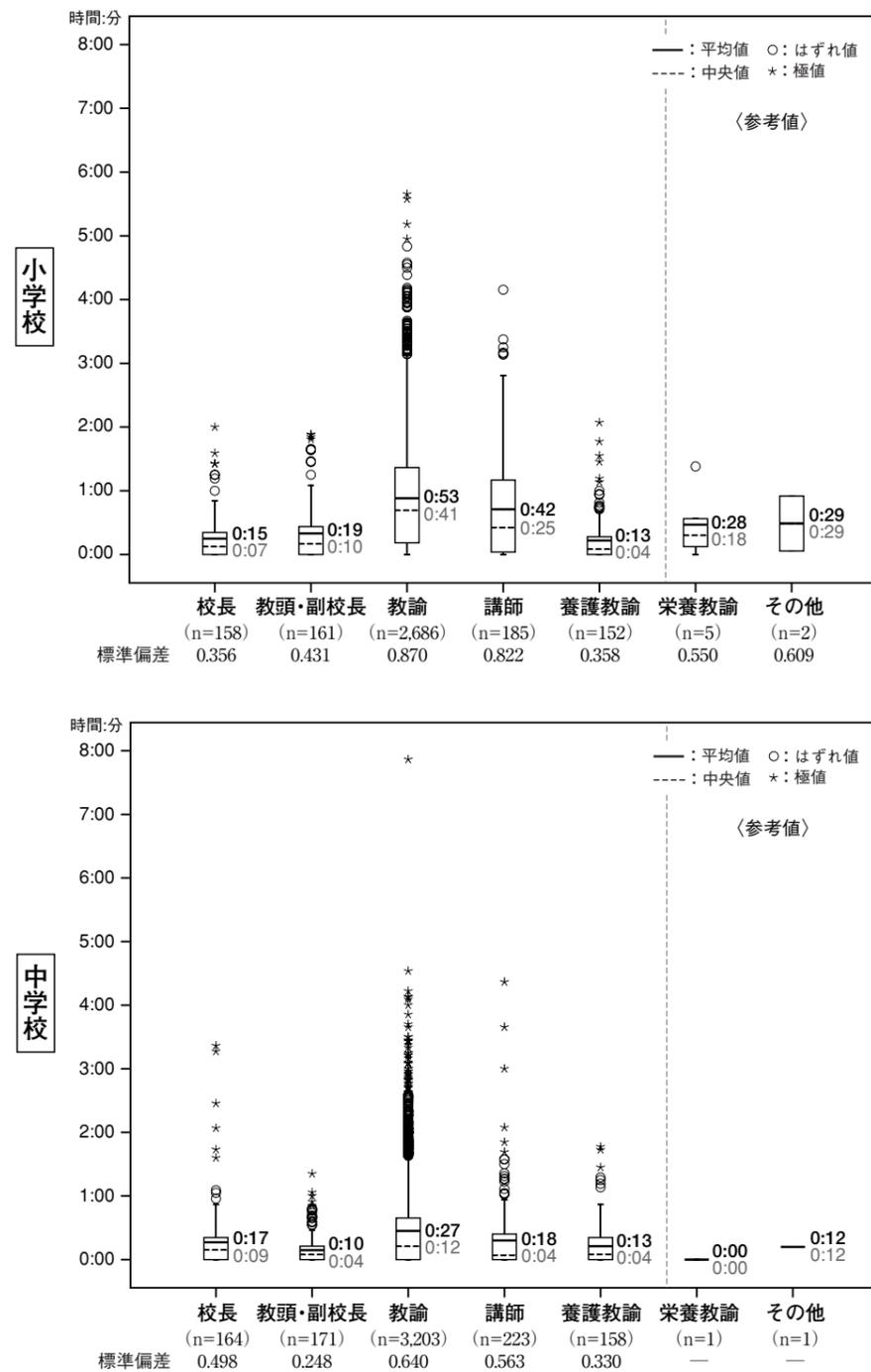
図2-1-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-1-6のように、小学校・中学校いずれにおいても教諭で最も長くなっている。特に小学校の教諭の方が長く、小学校の教諭は53分であるのに対して中学校の教諭は27分である。小学校では、教諭につづいて長いのが講師42分、次に教頭・副校長19分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師18分であり、次が校長17分である。

図2-1-5と図2-1-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、自宅では教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

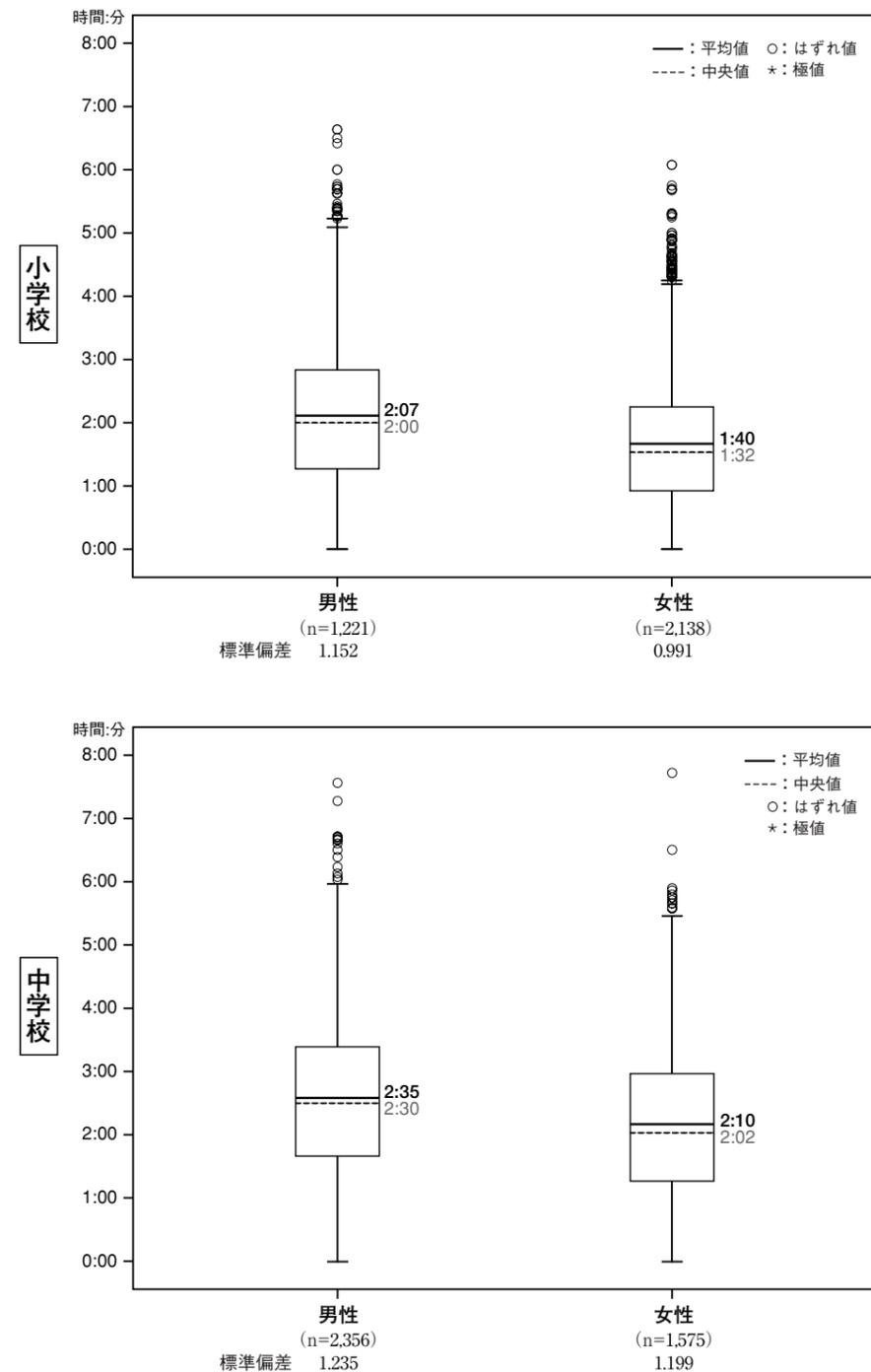
図2-1-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-1-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも約30分長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 2時間07分、女性教員 1時間40分、中学校:男性教員 2時間35分、女性教員 2時間10分)。

図2-1-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-1-8の通り、小学校においては女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(男性教員 43分、女性教員 49分)が、中学校においては、男性教員と女性教員の差はほとんどない(男性教員 24分、女性教員 26分)。

最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば 51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢層で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第1期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間39分、中学校では3時間20分である(図2-1-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間50分、41~50歳で1時間39分、51歳以上で1時間26分である。中学校では31~40歳で2時間40分、41~50歳で2時間19分、51歳以上で1時間46分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮することや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-1-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)

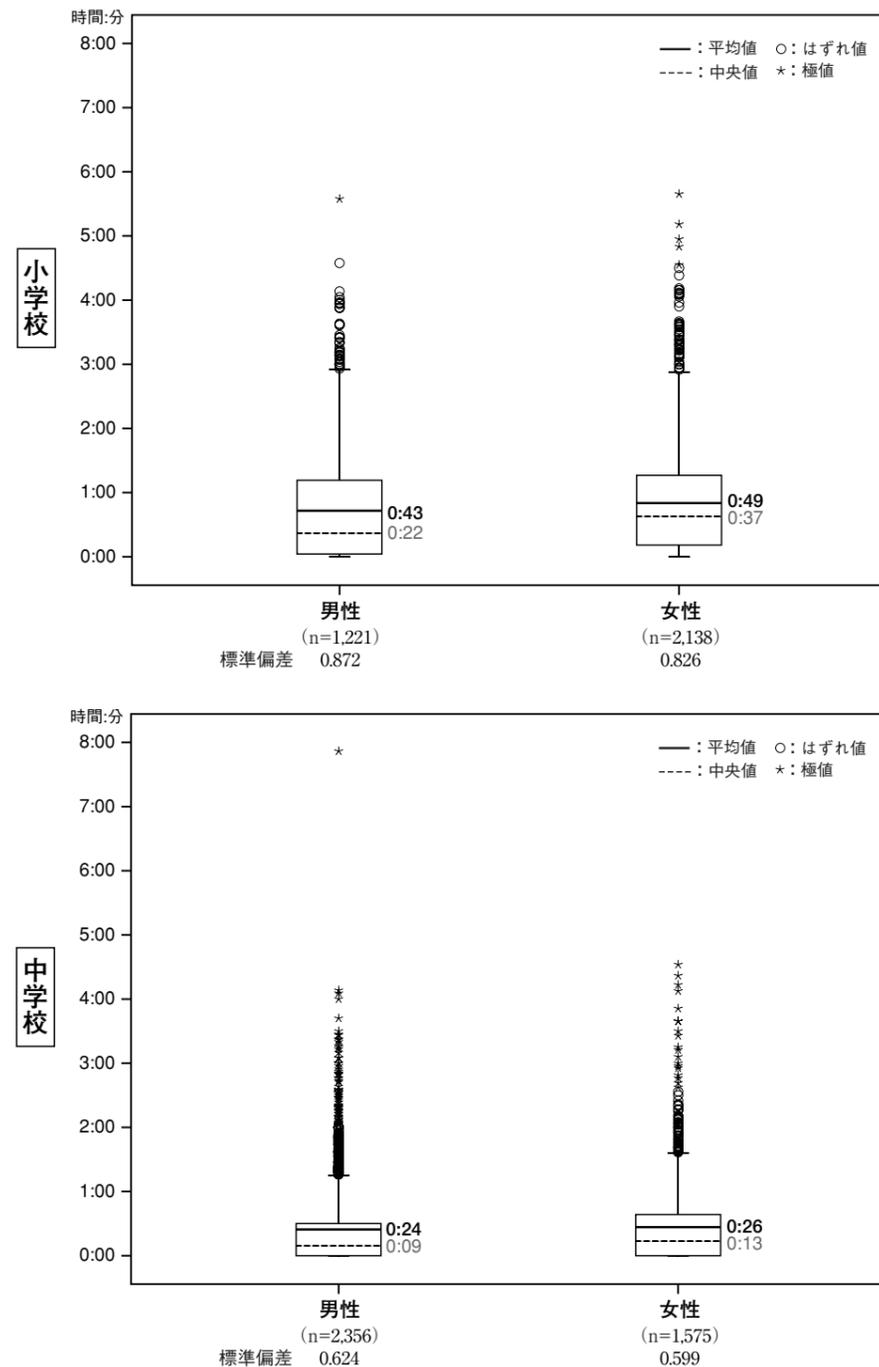
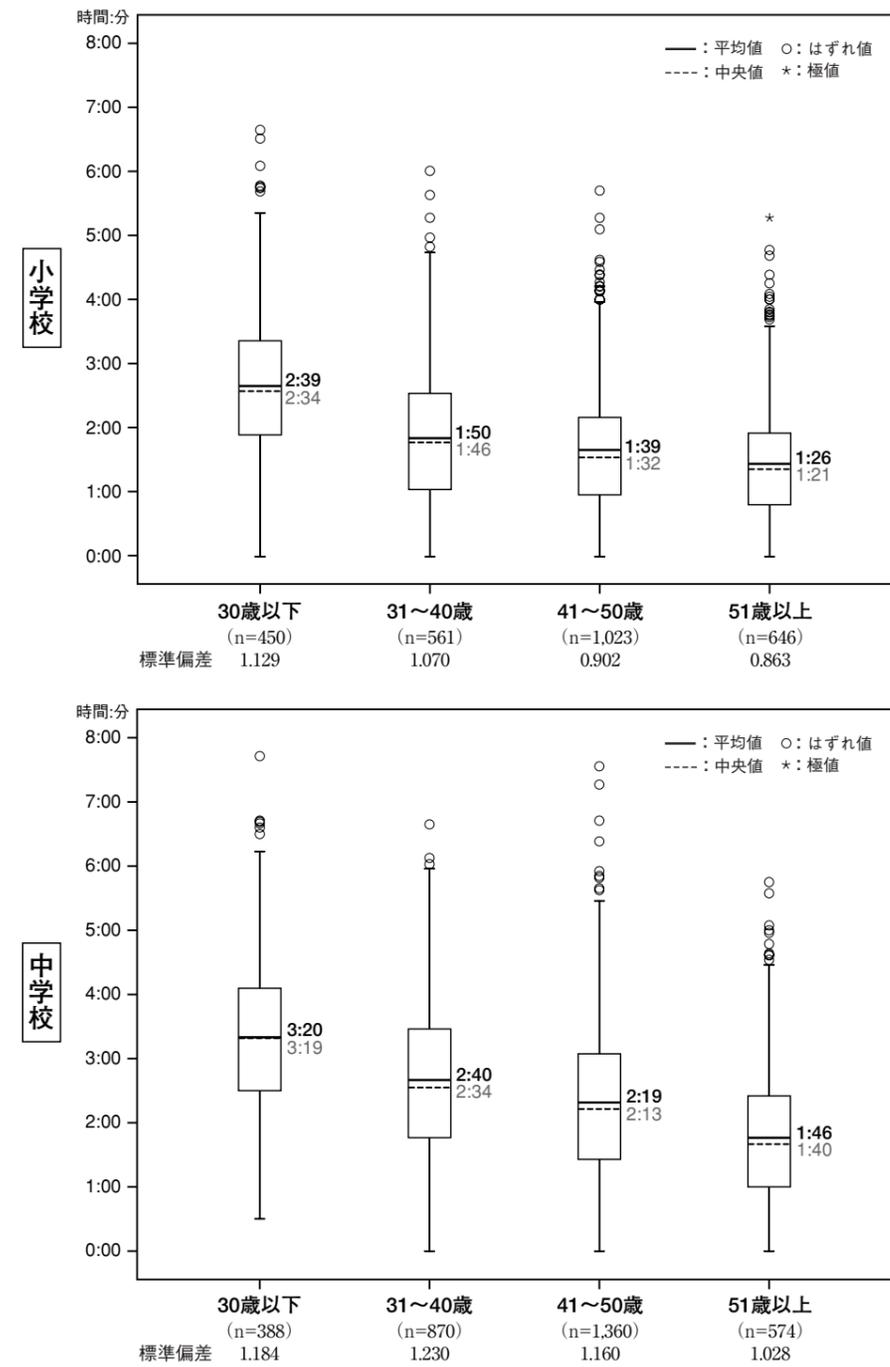


図2-1-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第1期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下が最も短く、31~40歳、41~50歳でやや長くなっているが、年齢によって大きな差はないことがわかる(図2-1-10)。小学校では30歳以下で45分、31~40歳で59分、41~50歳で56分、51歳以上で48分である。中学校では30歳以下で20分、31~40歳で29分、41~50歳で28分、51歳以上で26分である。

小学校・中学校いずれにおいても、30歳以下の若い教諭は、他の年齢よりも残業時間は長いものの(図2-1-9)、持帰り時間は他の年齢よりも短くなっている(図2-1-10)。

図2-1-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)

